

西陣の女

水上勉

新潮文

新潮文庫最新刊

新田次郎著	八甲田山死の彷徨	日露戦争前夜、厳寒の八甲田山中の雪中行軍における人間と自然の過酷な闘いを描く。	240 円
松本清張著	喪失の儀礼	医師と製薬界の荒廃した連繋と意外な愛憎関係がもたらした殺人事件を追う本格推理長編	280 円
倉橋由美子著	パルタイ	存在そのものに対する羞恥の感情を明晰な文 体で描き、新しい文学の出発を告げた作品集	200 円
源氏鶏太著	時計台の文字盤	性の氾濫する現代社会で、若者が抱いている 結婚観をさまざまなケースを交えて描く長編	440 円
小川国夫著	アポロンの島	南ヨーロッパの白い光のなかをオートバイで ひとり旅をする青年を描く表題作など22編。	200 円
星新一著	夢魔の標的	腹話術師の人形が生きた人間のように勝手に 喋り始めた……S・Sの名手の異色長編SFに	240 円
井上靖著	四角な船	大洪水の襲来を信じる奇妙な人物をめぐるユ ーモアの中に、現代社会を鋭く諷刺した長編。	360 円
有吉佐和子著	三婆	金満家の老人が死んで、正妻・妾・小姑の三 老女が同居……老いを凝視した表題作等7編	240 円
末広恭雄著	魚と伝説	魚にまつわるさまざまな伝説に、世界的な魚 類学の権威が科学の光をあてたユニークな本	220 円

新 潮 文 庫

西 陣 の 女

水 上 勉 著



新 潮 社 版

2075

西
陣
の
女

1

京都の西陣^{にしじん}で、帯地間屋として一流どころといわれた「山地商店」の当主地引佐太郎が、信濃^{しなの}松本市の織物業者本郷宇吉に案内されて、有明村^{ありあけむら}へきたのは昭和二十七年五月である。有明村は、松本から北へ入った山奥にあった。佐太郎は、歩きなれない足に豆が出来た。「えらい、遠いところにおますのやなア。わたしは、松本と地つづきにあるように思うとりましたんやが……えらい遠いところですのやな」

五十九歳に似あわぬ、生気にあふれた若々しい顔を、心もち憔悴^{しやうすい}させて、番頭の伊吉にいった。「えらい……山奥でヤマコがとれるんやなア」

穂高駅^{ほたか}で降りてから、三里の道をバスにゆられ、それからまだ一里も山奥へ徒歩で入らねばならなかったから、歩くのにへきえきしたのであった。道は坂が多かった。しかし、ヤマコのとれる有明村を視^みるのが目的であったから、案内してくれる松本の業者に、苦情をいうわけにゆかない。豆の出来た足をひきずりながら、坂道を登っていった。佐太郎についてきている伊吉は古い番頭であった。

有明村は、標高千メートルの有明山のふもとにある。昔から、山繭糸^{やままゆいと}をとる村だった。松本を中心にして生産される有明紬^{ありあけつむぎ}なる織物に、経糸^{たていと}として織り込まれてきた山繭糸を産する村である。

地引佐太郎は、西陣で、帯地のほかに着尺地きぢやくぢも少々あつかつていたので、松本の業者とも昔から取引があつて、いま、案内してくれている本郷宇吉も、その取引先の一軒であつた。佐太郎は、山繭紬を取扱っていたけれど、いつたい、山繭なるものがどうしてとれるものか、くわしいことを知らなかつた。番頭の伊吉も知らなかつた。無理もない。山繭は、天蚕を飼うて自然宮繭えいけんさせる昔からの養蚕法であつて、信州や、奥美濃おくみのの、山間僻地へきち以外では昨今はほとんど行われていない養蚕法だつたからである。それに、「山地商店」は帯地問屋であり、紬専門ではなかつたから、美濃紬や有明紬といわれる、地風に山繭糸の味をみせる特産織物などについては関心がふかくない、知らなくても、商売は出来たのである。ところが、この春、松本から、本郷宇吉が、有明糸をもつて西陣へきた際、はじめて、山繭つくりやめずらしい糸とり法を知つた。有明村が美しい村だということや、村びとたちが糸をとるのに、たいそうな苦勞をして、毎日精を出す有様をくわしくきいて、感動をおぼえたのである。

山繭は、桑で飼うのではなかつた。山に植林したクスギの葉で生育した。すなわち、山の斜面に、手の届くほどの高さに植えたわくら葉のクスギに、蚕のタネを放して、自然の中で育てるのだつた。この蚕のことを、有明では、「ヤマコ」とよび、桑の葉を喰くわせて、家の中で飼う蚕と、同じような大きさの繭が出来る。このヤマコ糸は、家蚕の糸とちがつて、特徴がある。生糸さいとより光沢がつよく、生糸と一しよに染めても、同じ濃さには染まらず、ひきもつよく、生糸に織り込んでもそこだけ地風に綾あやが出来、美しい独得の風合ふうあいが生れた。日本古代からの織物の中で、貴重なものとなされた理由は、そこにあつた。ヤマコ櫟くもぎの林はなだらかな有明山の麓ふもと一帯にあり、村人

たちは、朝から晩まで、このヤマコ飼いに精を出しているという。五月に春蚕はるこの繭がとれると、これを鍋なべの中で煮て、いわゆる座繰りで糸をとるのだと宇吉はいった。糸とりは女子供の仕事で、七輪の上に鍋をかけ、煮えたぎった湯の中へ繭を入れ、小さな手箒てぼうきで繭の肌はだを撫なでると、糸のさが、箒についてくる。これを七本か十本程に集めて、指さきでよりながら、糸わくに巻くのであった。

原始的といってもいい方法でつくられる糸が、生糸にまけない光沢をもち、紬織物に独自の風合をみせるのである。話をきいただけで、有明の村が、不思議な村のように思われたので、地引佐太郎は、その頃がきたら、一ど見物にゆきたいと宇吉に約束していたのだった。

西陣だけでなく、中京なかぎょうあたりの問屋筋でも、昭和二十七年頃は、いわゆる日本の織物業界全般に化学繊維時代が来ようとしていた時で、どの問屋も、化学繊維や合成繊維を扱った。空気や石炭からつくられる糸が、着尺地にも、帯地にも、小物地にもなり、洋装一辺倒の服飾業界を席捲せつけんし、和装界にもものびてゆき、服地で着物をつくることが流行したり、古風な紬や、山繭紬などに高価な金をつかう客は少なくなりつつあった。何もかもが合理主義となり、着る物も、たべる物も、格安で見映みばえのする物が重宝がられはじめた時期である。いってみれば、有明紬などは、斜陽といえたかもしれない。いや、斜陽というよりも、滅亡寸前にあったといわねばならない。だから、地引佐太郎は、松本の宇吉から、有明村の話をきいた時に、感動もおぼえ、一ど見学しておかないと、見納めになるかも知れぬという気がして、信濃ゆきを待ちあぐねて、ようやくにして、その願いをこの日果したのである。

いま、その有明山が、佐太郎たちの歩く峠道のはるか前方に、盆を伏せたようにうかんでいた。山のふもとに、点々と藁ぶきの入母屋が眼に入った時、佐太郎は、思わず、息をついて、

「きれいな村やなア、伊吉……まるで、絵に描いたアるようやなア」といった。そばにいた本郷宇吉も、

「社長さん、有明は、まだ、ひくい方でござります。あのうしろには、アルプスの山がみえましよう。南から……乗鞍、焼、穂高、双六、野口五郎、燕の順番に……峰々がかすんでみえるでございましょう……山登りの学生さんらも、さいきんはこの有明村から、登ってゆく人もござります」

といった。いわれて、佐太郎は、足をとめ、いま、有明山のうしろに、うす墨をはいたようにみえる山々の波に眺め入っていた。空の色に溶けてしまいそうに思われるほど山々は、よくみると、それぞれ、屹立した頂きをみせていて、晴れた空を圧していた。五月のことでもあったから山奥のその季節は、春の名残りのおそ咲きの山桜がまだ咲いていて、山裾の斜面は、櫟や櫟の大きな枝が、さみどりの新芽をすかせて、うるしをとかしたようにぬれてみえる。

村へ入った時、わずか、その村が四十戸ほどしかなくて、どの家も似通うた入母屋の茅藁ぶきであるのに眼をとられた。同じような形をした母屋の下を、瓦で一間ほど軒をはり出させて、座敷縁をもった古い農家はいかにも、のどかな感じだし、どの家も、作業小舎がはなれて建っている。本郷宇吉はこの村で、もっとも糸とりに熱心だという区長の家へ佐太郎を案内した。区長は、野崎作右衛門といい、糸取りひきでよく松本へも顔をみせていたので、五月には西陣の帯地間屋

「山地」の社長が見学にくるといふことをきいていたので、三人の姿がみえると、戸のしまっていた座敷縁を開け放して、歓待してくれた。作右衛門は七十近い瘦せた男だったが、まだ七十とは見えぬ艶々した顔をしていて、佐太郎を作業小舎の方に案内して、女たちが座繰りしている模様をみせた。四人の村女がいた。二人は三十年輩で、あとの二人は、まだ十七か八の娘だった。木綿のよごれた緋の前かけをし、頭に手拭をかぶり、紅い襷をかけて、甲斐々々しく糸車を廻していた。四人の女の前には煮えたぎった鍋があつて、その中で繭がぐるぐるとコマがまわるように廻っている。糸はしがひっぱられて繭が舞うのである。女たちは、ペダルを踏んで糸枠の車をまわし、巧妙に鍋の中の繭から糸をたぐつて、上手によりながら糸をとっていた。むつつりと押しだまり、立膝腰になつて働いている姿は、佐太郎には、ひなびた村でみるだけになまめいてうつり、しばらく、声が出なかつた。

「どういふわけでござりましょう。有明には、むかしから、どんな干魃でも枯れたことのない川が流れておりましてな……水源地は遠いアルプスの方だという人もありますが、ひよっとしたら、有明の裏側にあるやもしれません……村へ流れてまいります有明川は……水が美しくうて、繭を煮るにも、米をとぐにも、何をしますにも、この川水をつこうておりますが、……よそさまにない貴重な水でござりまして、糸の艶がちがうのでございます」

作右衛門は案内しながら、足もとにつまれてある糸枠の一つをとりあげてみせて、

「……みて下さいまし」

佐太郎にさし示した。なるほど艶があつた。雪のような白さだった。糸にふれた指先が、染ま

るかと思われるほどに白かった。

有明の水がきれいであるとは、本郷宇吉からもきいていたし、佐太郎は、いちいち作右衛門の説明に感心してうなずいたが、村を出て、クスギ林の全景をみた時には、さらにまた息をつめねばならなかった。みごとなクスギ林だった。有明山のなだらかな裾いちめんに、村人たちが丹精して植えているクスギ林は、いま、みどりの絨毯じゅうたんでも敷いたように、雲霞うんかの下にひときわ色をして浮いてみえる。

「このような山で……自然に生育する蚕でござりますから……なかなか、面倒なこともござりましてな」

と作右衛門はいった。

「蚕をねらいよりまずのは、鴉からすがいちばん害敵でござります。わたしらは、朝から晩まで鴉追いに……真剣でござります。火薬の配給をいただきまして、空鉄砲からてつぽうを打って、鴉を追う当番がござります。多い時には、千羽もの鴉が山に集まりまして……そのような時は、村、総出で、鴉を追うて走るんでございます」

佐太郎は、きいていて、村人たちの苦勞が思われ、涙がにじんだ。広大なクスギ林に、ヤマコを生育させても、それが、一日にして鴉の餌えさになってしまえば、折角、タネからかえしてクスギに這はわせた苦勞も、水泡に帰すわけである。

「ずいぶんと苦勞なことすな……わたしらは、京の町で反物を売っております身でありながら、糸とりさんたちの……丹精されるご苦勞は何ほども知りませんなんだ。あしたからは……店の者

らにも、よく話してきかせて、糸というものがどれだけ大事なものを教えてやりとうござい
ます」

と佐太郎はいった。

その日は、作右衛門の家で昼食が出て、佐太郎と番頭の伊吉は、このあたりの名物だという山
芋や、山菜の煮つけをよばれ、明るいうちに村を出ようと帰り仕度にかかった。と、この時だっ
た。作右衛門の家の前へ、五十年輩の小柄な男がしょんぼりと佇んでいて、

「ごめん下さりませ」

と家の者をよんでいる。作右衛門が縁先から廻った。

「何じゃ、虎やないか、どした」

といっている。虎といわれたその男は四十二、三だろうか。無精髭の生えた不健康そうな蒼い
顔を、心もちひきしめると、しょぼしょぼの眼を細めて、

「あのう……区長さん……このあいだ……お願いしておきましたことを……京の旦那さんに頼ん
で下さりましたでしょうか」

といった。作右衛門は、思い出したように、ああ、そうやったな……そうやった、とうなずき
ながら、

「ちよっと、そこに待っとれ……たのんでみるぞ」

といい、せかせかと前かがみに座敷縁を廻ってくると、今しも庭石にならべた靴に足を入れて、
大きく深呼吸しながら、この家の庭先を埋めた岩つつじに眼を落していた佐太郎に向い、

「山地の社長さん……ちょっと……お願いがござります」

といった。佐太郎は、少し酒をよばれていたので、ほんのり染まった眼もとを作右衛門の方へ向けた。

「じつは……この村の……糸とりをいたしております家の娘でござりますが……ぜひとも……京へ奉公に出たいというのがおりまして……社長さんが、五月においでするという音がしりましたで……その節にはぜひ頼んでくれと、父親からわたしが頼まれておりましてんでございます……その親爺めが……いま玄関へきとるんでございます……」

佐太郎は瞬間、番頭と顔を見合せた。本郷宇吉も、眼を作右衛門にむけた。

「えらい、厄介な頼みやも知れませんが……このような無躰ぶしつけなお願いが聞き届けてもらいますものなら……お願いしとうございます」

恐縮したように作右衛門はいうのであった。地引佐太郎は、不意にそのようなことをいわれて返答にまごついたが、西陣業界で、女工が不足していることは知っていた。「山地」にしても、二、三人の不足をそのままにして、店をきりまわしてきていた。いま、作右衛門から、村の娘が一人京へゆきたいといっているときいて、内心、佐太郎は、これは妙なことになったぞと思った。「区長さん……娘さんは……いくつでござります」

と佐太郎は、作業小舎の軒下で、紅い襷をかけ、まめまめしく糸とりしていた娘たちの、陽焼ひやけた顔を思いだしながら聞いた。

「十八でございます。気性のおとなしい……ええ娘でござりまして……家が子だくさんなもの

でござりまするから、親がうんでおいて……はずかしいことながらよう養わんのでござりまする……」

作右衛門はふふふとわらって、ふたたび、玄関の方へ縁をまわりこんでゆくと、

「虎さん、こっちへこんか」

といった。と、庭先のくぐり戸から、腰を折って入ってくる無精髭の男を佐太郎はみた。瞬間、眼を睜^{みは}った。男のうしろに、いつのまにか白い肌をした、面長な少女が、成熟した大柄な軀^{からだ}に、紺^{こん}紵^すをきて三尺帯をしめ、しょんぼりと立っていたからだった。

へあの娘だろうか」

美しい顔だちだった。暮れなずむなすび色の有明山を背にして、いま、少女の白い顔と裾前に組んだむっちりした足首が、夕顔の花のように白くういてみえる。

「あのお娘^{おに}さんでござりまするか」

「はい、さようでございます。……もんといましてな……十八でございますねや。村で百姓をしております虎三の家の二女でござりまして、姉は、諏訪^{すわ}のオルゴール工場へ出とりますけれど、この娘は、糸とりが上手で……今日まで、学校を出ると、ずうーと村におって、クヌギ林を守りしてくれましてござります……心のやさしい働き者でございます」

作右衛門がそういうと、無精髭を生やした父親は、頭を下げて、

「よろしゅう、たのみますでござります」
と力のない声でいい、娘の方を顎^{あご}でしゃくった。

「もん……さ、社長さんに……お辞儀しなさい……」

もんというその娘は、花びらのような小さな口もとをつぐんで、じつとうつむいたままでいた。

2

地引佐太郎が、当時十八歳であった刈田紋を京都へつれてくることになった経過は以上である。佐太郎は、正直いって、有明村の区長から、紋の身柄をたのまれた時、これは、結構な娘をつれて帰ることになったと嬉しかった。西陣へ帰れば、どこのお店だって、紋をほしがるだろう。いや、よそへやるより、今出川^{いまだ}智恵光院^{ちえこういん}にある「山地」の店でつかった方がいい。おとなしい顔だちの、すなおそうな娘だ。利発そうだから下働きからおぼえさせれば、すぐに店の仕事もおぼえるだろう。客のたてこむ本店は、昔ながらの畳の敷いた帳場だったが、さいきんは、応接間だけ洋風に切りかえている。丸い大テーブルにソファをめぐらせた十畳ぐらいの部屋を、佐太郎は自慢していたが、ここへ茶をはこんだり、品物をはこんだりする娘は、小綺麗^{こぎれい}であるにこしたことはない。現在店でつかっている娘は四人いるけれども、どの顔も、有明の紋にはまけるだろうと佐太郎は思った。それほど紋は色白で造作もとのついていた。

「えらいことになりましたな……社長さん。遊山^{ゆざん}気分で、ヤマコの見学においてやしたちゅうに……とんだ大けな荷物を背負うて帰らんなんことになって……申しわけござりません」
と本郷宇吉が、うしろから番頭と一しよに五歩ほどおくれについてくる紋をふりかえりながら

ささやいた時に、

「とんでもおへんわ本郷さん……わしは、えらい拾いもんをして帰ることになりました」

と佐太郎は嬉しげにいった。

「西陣はいま、人手不足で困ってます。どこの工場やとて、女工さんが足りんで困っております。紋ちゃんはどこへなりとつとめられます。けど、わたしはよそへ、あの娘をやりとうはおへん……わたしの店で使わせてもらいます」

「社長さんのお店で」

本郷宇吉は羨ましげな眼をしてみせた。

「親爺さん……喜びますやろて……ほんまに……ご親切のほど……ありがとうございます」

と頭を下げた。佐太郎はまた、豆の出来た足をひきずって峠をこえたが、有明村が見えなくなる穂高町の境へきた時に、うしろをふりかえると、紋はしょんぼり皆とはなれて村の方をふりかえっていた。佐太郎も、伊吉も、眼頭をしばたかせた。

区長の作右衛門と、父親の虎三の説明で、紋の生家の事情は、佐太郎と宇吉だけは、この時、あらかたわかつていた。紋は二女であったが、下にまだ弟妹が四人いた。虎三は有明村の段という地区に生れ、家業の炭焼きと山繭とりをしていたが、持田も、山もない貧乏人だった。ところが、女房のかねが六人もの子をなした。長女はこの年二十歳で、諏訪へ働きに出ているが、あとは、五人とも家において、末っ子はまだ学校へ行っている。〈子だくさんのくせして、よう養う甲斐性があるせんのや〉と作右衛門がいったように、虎三の家では子の養育に手子ずつっていた。